

「複言語サポーターに必要な能力」の捉え方の違い：
 複言語サポーター・日本人コーワーカーの語りから
 THE DIFFERENCE OF THE MEANING OF “THE COMPETENCY FOR
 PURILINGUAL SUPPORTER” BETWEEN PURILINGUAL SUPPORTER AND
 JAPANESE CO-WORKER

徳井厚子, 信州大学
 Atsuko Tokui, Shinshu University

1. はじめに

現在、世界的に移動する人々が増え、それに伴い、生活、学校等様々な現場で外国人への支援が必要となってきた。総務省（2006）は「多文化共生」について「国籍や民族の異なる人々が互いの文化的違いを認め合い対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」としている。外国人が地域社会で安心して住み、生きていくために、複言語サポーター(外国にルーツを持ち、複数の言語を駆使しながら地域や学校で外国人住民に支援を行っている者)の存在は欠かせないといえるだろう。しかし、これまで複言語サポーターに光をあてた研究はこれまであまり多く見られなかった。複言語サポーター自身がどのようなコミュニケーションをしながら支援を行い、彼・彼女にとってどのような資質や能力を必要とするかについて明らかにすることは、多文化共生社会の実現にとって重要な意味を持つと考えられる。

当研究は、複言語サポーターにとってどのような資質・能力が必要かについて、日本に住む複言語サポーター及び日本人コーワーカー（複言語サポーターと共に働いている人をこのように呼ぶこととする）の語りを分析したものである。

2. 研究概要

発表者はこれまで複言語サポーターが「どのようにコミュニケーションを行いながら支援を行っているのか」についてインタビューを行ってきた。インタビューは一人約1時間～1時間半かけて半構造化インタビューの方法で行ってきた。インタビューは複言語サポーター40名、日本人コーワーカー10名に行った。これらの語りのうち、複言語サポーター4名と日本人コーワーカー6名に「複言語サポーターに必要な資質・能力」についての語りが見られた。当研究ではこれらの語りを内容によってカテゴリー化し、複言語サポーターの語りと日本人コーワーカーの語りにどのような違いが見られるかについて分析、考察を行う。

なお、複言語サポーターは学校や地域で生活相談、医療通訳等を行っており、出身は韓国、ブラジル、フィリピン、中国である。また、今回のインタビュー対象の日本人コーワーカーは複言語サポーターの上司のケースも含んでいる。

3. 分析結果

語りを分析した結果、「複言語サポーターにとって必要な資質・能力」の捉え方について、以下のケースがみられた。

- ・複言語サポーター、日本人コーワーカーともに共通のカテゴリーと記述が見られたケース
 - ・複言語サポーター、日本人コーワーカーともに共通のカテゴリーとして挙げられたが記述内容、視点が異なっていたケース
 - ・複言語サポーターのみにカテゴリーが見られたケース
 - ・日本人コーワーカーのみにカテゴリーが見られたケース
- 以下ではこのそれぞれについて述べる。

3.1 複言語サポーター、日本人コーワーカーともに共通のカテゴリーと記述が見られたケース

まず、複言語サポーター、日本人コーワーカーに共通のカテゴリーと記述が見られたものとして、「知識」「安心」「寛容性」「忍耐強さ」「共感」「聴く力」が挙げられる。これらはいずれも個人内における異文化間能力という点で共通している。個人が持つべき必要な知識、態度として捉えられている。

3.2 複言語サポーター、日本人コーワーカーともに共通のカテゴリーとして挙げられたが記述内容、視点が異なっていたケース

複言語サポーター、日本人サポーターともに共通のカテゴリーとして挙げられるが、具体的な記述や視点が異なっているケースがいくつか見られた。「橋渡し等の仲介力」「感情のコントロール力」「支援の範囲の自覚」が共通して見られたカテゴリーである。以下それぞれについてみていく。

【橋渡し等の仲介力】

複言語サポーターの語りは「担任と子どもとの間の橋渡しとしての役割」が見られた。橋渡しを「つなぐ」という視点で捉えている語りである。一方、日本人コーワーカーの場合、「つなぐ役割」という内容も見られたが、「患者と医療者の文化的コミュニケーションギャップ(診察料が前払いであることなど)の橋渡し」「医療者と患者の文化、制度の違いによるトラブルへの介入」のようにトラブルへの介入という視点から「橋渡し」を捉えている語りも見られた。これらの日本人コーワーカーの語りは、複言語サポーターに必要な資質・能力として単なる「仲介力」だけではなく、「摩擦の仲介力」の必要性を示唆しているといえる。

【感情のコントロール力】

複言語サポーター、日本人コーワーカーともに感情をコントロールする力の重要性に関する語りが見られた。複言語サポーターの語りには「感情的にならない」という複言語サポーター自身の立場からの捉え方も見られたが、「子どもの感情的な部分をコントロールするスキルの必要性」「相手の感情のコントロール」が見られた。これらは「対相手」の視点に立つ立場からの捉え方である。一方、日本人コーワーカーの語りには「自身にストレスがたまらないようにする必要性」のように複言語サポーター自身の立場から捉えた自己コントロール力に関する語りが見られた。

【支援の範囲の自覚】

複言語サポーター、日本人コーワーカーともに複言語サポーターの支援の範囲を自覚する力の重要性に関する語りが見られた。複言語サポーターの語りには「支援の範囲を線引きする大切さ」という語りが見られた。一方、日本人コーワーカーの語りには「アドバイスや感情移入等入り込みすぎは禁物」といったより具体的な視点からの捉え方や、「やりすぎない」「解決する立場でない」「言語の専門でありケアする立場ではない」といった支援の境界線に対してより厳格な視点に立った捉え方が見られた。

3.3 複言語サポーターのみにカテゴリーが見られたケース

複言語サポーターのみに見られたカテゴリーとしては、「子どもの自尊心のサポート」が挙げられる。例えば「子どもの自尊心への貢献」「子どもの自信回復」の重要性に関する語りが見られた。「対相手」の視点に立った語りであり、支援者＝被支援者の二者間の関係性の中で能力を捉えている。

3.4 日本人コーワーカーのみにカテゴリーが見られたケース

日本人コーワーカーの語りのみに見られたカテゴリーとしては「問題整理」「責任感」「中立」「公平性」の重要性に関する語りが挙げられる。これらは組織の一員として必要な資質・能力という視点に立って捉えられているといえる。組織という構造の中でどのような役割が必要かという視点に立ち、複言語サポーターに必要な能力を捉えている。

また、「複言語サポーターにしかできない文化心情の理解」のように複言語サポーター独特の知識と能力に言及する語りも見られた。一方で「日本のコンテキストの知識の不十分さ」に関する語りも見られた。

さらに、「当事者同士のネットワークの弊害」「強すぎる関係の弊害」のように、複言語サポーター同士が強いネットワークを築くことによって逆にマイナスとなってしまおうというマイナス要因についての語りも見られた。

4. 考察

複言語サポーターの語りと日本人コーワーカーの語りで見られる「複言語サポーターに必要な資質・能力」についてどのようなことが言えるだろうか。

まず、複言語サポーターと日本人コーワーカーに共通したカテゴリーとして挙げられたものには、「知識」「安心」「寛容性」「忍耐強さ」「共感」「聴く力」が挙げられた。知識的な側面は「知識」であり、態度の側面は「安心させる態度」「寛容性」「忍耐強さ」「共感」「傾聴」が挙げられる。これらは個人内にある知識や態度であるが、これらは複言語サポーターと日本人コーワーカーの双方にとって「複言語サポーターにとって重要な資質・能力」として認識されていることが示唆される。

また、複言語サポーターと日本人コーワーカーそれぞれに異なった面が語りに見られたことから、複言語サポーター、日本人コーワーカーにとって「複言語サ

ポーターに必要な資質・能力」について異なった捉え方をしていることが示唆された。

複言語サポーターの語りからは、支援の対象となる相手を意識した「対相手」の視点に立った語りが見られた。例えば、「子どもの感情的な部分をコントロールするスキルの必要性」「相手の感情のコントロール」のように「相手の感情をどのようにコントロールするか」という特徴が見られた。また「子どもの自尊心への貢献」「子どもの自信回復」のように支援の対象の「子ども」の自尊心や自信の回復にどのように貢献できるかという立場からの語りが見られた。こうした「対相手」の視点からの語りがいくつか見られたことから、複言語サポーターは支援の場において「支援者」「被支援者」の二者間の関係の中で資質・能力を捉えているということが示唆できる（図1参照）。

一方、日本人コーワーカーの語りからは、複言語サポーターに必要な資質・能力として「摩擦のミディエータ」のようにトラブルが起きた場合に対応できる力の必要性に関する語りや、「支援の自覚」についてより厳格な意識を期待する語り、「責任感」「中立性」といった「組織の一員」として必要な資質・能力に関する語りが見られた。また「日本のコンテキストの不十分さ」「複言語サポーターにしかできない文化理解」「ネットワークの弊害」のような長所、短所を客観的にかつクリティカルに捉える語りも見られた。日本人コーワーカーは、複言語サポーターに必要な資質・能力を捉える場合、摩擦のトラブルの起きる場や、組織で働いている場の一員としての観点から資質・能力を捉えていることがわかった。「支援者」「被支援者」の二者間の関係の中というよりもむしろ「支援者」「被支援者」を取り巻く「場」との関連という側面から資質・能力を捉えているということが示唆できる（図2参照）。

図1 二者間における資質・能力の捉え方

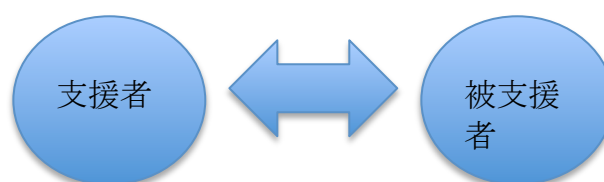


図2 場との相互作用における資質・能力の捉え方



今回、複言語サポーターに必要な資質・能力についての複数言語サポーターの語りにおいては、図1のような二者間における関係の中で資質・能力を捉えているものが多く見られた。一方で、日本人コーワーカーの語りにおいては、図1のような二者間における関係の中で資質・能力を捉えているものも見られたが、「場」との関連から資質・能力を捉えるものが見られた。

これまで、異文化間能力に関する議論の中では「共感」「敬意の表示」「相互作用における態度」など二者間における関係の中で捉える捉え方が多かったように思う（Ruben1976 など）。異文化間能力など資質・能力を論じる場合確かに二者間の関係の中で捉える捉え方も重要であるが、それに加え、日本人コーワーカーの語りにみられたように「場」との関連で資質・能力を捉えていくことも重要であると考えられる。

加賀美・徳井・松尾(2016)は、個に影響を与え、逆に個から影響を与えられる環境としての場の視点から、異文化間教育における場としての環境に注目することの必要性を述べている。複言語サポーターの資質・能力を論じる場合においても、「場」と個人の相互作用という観点から論じていく必要があるだろう。

当研究ではこれまで行ったインタビューをもとに分析を行ったが、今後以下の研究を行うことが課題として挙げられる。

- ・ 複言語サポーターへのインタビューの他、日本人コーワーカー、外国籍住民へのインタビューを行い、総合的、多角的な観点から複言語サポーターに必要な資質・能力について検討をしていくこと
- ・ 「場」と「個人」の相互作用という観点から、複言語サポーターにどのような資質・能力が必要かさらに検討し明らかにしていくこと

付記

当研究は、H26-28年度科学研究費（基盤研究C）「複言語サポーターの複言語・複文化能力に関する研究—言語使用の実態調査を通して—」（代表徳井厚子）の研究成果の一部です。また、CAJLEでの発表においては、多くの貴重なご意見をいただきました。心から感謝申し上げます。

参考文献

- 加賀美常美代・徳井厚子・松尾知明編（2006）『文化接触における場としてのダイナミズム』明石書店
- 総務省（2006）『多文化共生の推進に関する研究会 報告書』
- 西田ひろ子編（2000）『異文化間コミュニケーション入門』創元社
- Ruben,D.B. (1976). Assessing Communication Competency for intercultural adaptation. *Group and Organization Studies*, 1, 334-354.